様式７

論文内容要旨

報告番号	甲 総 第 22 号	氏 名	塩川 奈々美
学位論文題目	九州北部地方における地域言語の動態に関する研究		

本論文は，九州北部地方における地域言語の動態に関する研究をテーマにしたものである。言語地理学的かつ社会言語学的研究という立場から，方言の地理的広がりがどのように変容したのか，その変化にどのような要因や背景が関与しているのかについて検討し，九州地方の北部に位置する長崎街道上の地域における言語変化（動態）を明らかにすることが目的である。この目的を達成するため，九州北部地方を横断する長崎街道上の地域25地点において大規模なグロットグラム調査を実施し，計99名の調査結果を得た。この調査結果をもとに語彙・文法・敬語法の観点から当該地域におけることばの動態を追った。

序論となる第1章では，九州方言における言語地理学的研究の現状と課題を整理し，本研究の意義を位置づけた。第2章では，本論文の目的と研究方法について整理し，本論文で用いるデータについてその調査概要を整理した。

第3章では長崎街道グロットグラム調査の結果を概観すべく，語彙項目・文法項目について地理的・世代的分布の現状を俯瞰した。第3章で明らかになったことは，東条編（1954）に提唱される方言区画の枠組みに囚われない方言分布の現状があるということである。地理的分布（地域差）について世代差という視点を掛け合わせることにより，言葉の拡がりや共通語化の様相を多角的に捉え，当該地域における「共通語化」や「地方共通語化」に類する経年変化の状況を指摘した。

第3章で認められた方言の諸相を受けて，第4章・第5章・第6章では九州北部地域における方言敬語に焦点を当てた分析を行った。語彙・文法に係る方言とは異なり，敬語法の地理的・世代的分布は複雑であり，グロットグラム図や言語地図，談話資料等を活用した多角的な分析を行うことにより，長崎街道上の方言の動態を明らかにした。

さらに第7章では，統計的手法の一つである「林の数量化Ⅲ類」を活用して項目別に解析し，長崎街道上の地域における方言敬語運用の特異性を明らかにした。個別語彙，個別文法レベルで形態的な違いのみを分析するのではなく，語彙・文法・敬語法を包括的に解析したことで，地域方言のシステムに存在する差異を見出した。

語彙・文法項目において共通語化が進行する中，福岡県から佐賀県下にかけて行われるシャル敬語は，全世代が使用するという点でその運用の実態は特異であると言える。本来，尊敬の意味を表すために用いられていたはずのシャル敬語が「親愛語」（岸江1998・辻2009）や対者敬語的な振る舞いを見せており，こうした方言敬語システムの変容は当該地域に限ったものではないことが予想される。今後各地で行われる敬語研究においては，伝統的に行われてきた敬語形式の違いや敬意度の差に着目するだけでなく，地域方言の体系の違いを前提とした研究が展開されるべきであり，本研究はそうした研究の先駆けとして位置付けることができる。

これまでの言語地理学的研究では，言語地図上に描いた地理的分布を俯瞰することにより，言葉の伝播や言語接触による方言形性の史的展開を読み解いてきたが，本研究では世代差という社会学的研究の視点を含めることにより，当該地域における方言の動態をより多角的に分析することができた。これらの研究成果はグロットグラム調査に基づくものであるために，1地点当たりの話者数が少ないことや，調査地点の広がりが線上に限られてしまうことで残る課題も多い。本研究の成果を補完し，より一層進展を図るためにも，今後とも言語地理学的研究と社会言語学的研究の相補完的な視点に基づく調査研究が必要である。

様式9

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 総 第 22 号	氏 名	塩川奈々美
審査委員	主 査 依岡隆児 副 査 掛井秀一 副 査 田口太郎 副 査 岸江信介		

学位論文題目　九州北部地方における地域言語の動態に関する研究

審査結果の要旨

本研究は，言語地理学的かつ社会言語学的研究という立場から，方言の地理的広がりがどのように変容したのか，その変化にどのような要因や背景が関与しているのかについて検討し，九州北部地方における地域言語の研究で，言語変化の軌跡を追いながら語彙・文法・敬語法の観点から当該地域における言語の動態について明らかにすることを目的としている。

この目的を達成するため，グロットグラムという手法を用いて，江戸時代に整備された長崎街道（小倉市-長崎市間）に位置する25地点で各々4世代の生え抜き話者全員に単独で面接調査を実施し99名の調査結果をもとに言語変化の実態の解明を試みている。これまで九州北部各地での調査や報告はあったが，今回のような規模の調査は皆無であり，かつ，今回のような手法によって福岡，佐賀，長崎各県の方言を比較するという試みも初めてである。

これまでの言語地理学的研究では，言語地図上に描いた地理的分布を俯瞰することにより，言葉の伝播や言語接触による方言形性の史的展開を読み解いてきたが，このように，本研究では世代差という社会学的研究の視点を含めることにより，当該地域における方言の動態をより多角的に分析することを可能にした。たしかに，これらの研究成果はグロットグラム調査に基づくものであるために，1地点当たりの話者数が少ないことや，調査地点の広がりが線上に限られてしまうことで残る課題も多い。本研究の成果を補完し，より一層進展を図るためにも，今後とも言語地理学的研究と社会言語学的研究の相補完的な視点に基づく調査研究が必要であろう。とはいえ，本論では九州北部地方における敬語使用に関して社会言語学的な視点から地理的変異と世代的変異の視点から分析し，シャル敬語に関して福岡県と佐賀県の県境に運用上の境界があることを見出した。この点は日本の方言の学会である日本方言研究会でも評価されているところである。また，語彙・文法・敬語法の調査結果を分析し，九州北部方言の方言区画を行い，その実態を明らかにした点は九州北部方言の実態を一挙に把握することにもつながり，これによって日本の方言研究界において新たな知見をもたらしたと評価できる。

近年，このような地理的に広域かつ社会的な調査を短期間かつ単独で実施した例は見られず，今後このような調査結果を分析することは現代における九州方言の実態を把握することにもつながることが期待され，日本の方言研究界においてさらに大きな貢献をもたらすものであると確信する。

また，本論文提出に先立ち，本大学院総合科学教育学部の「博士学位審査に関する内規9条に関する項目」で規定されている，主論文ならびに複数の副論文にあたる公刊論文の提出を確認している。

以上から，審査委員会は本論文を，博士論文として一定の水準に達するものであり，博士（学術）の学位に相当するものと考える。